

天皇即位の大嘗祭と阿波忌部氏

忌部文化研究会

会長 林博章



今上天皇陛下は2019年4月30日

に退位、翌5月1日に皇太子が即位され、11月14日〜15日に大嘗祭が行われる運びとなった。大嘗祭とは農耕儀礼を母体とし、天皇が即位して最初の「新嘗祭(いになめさい)」のことを指す。古代阿波国を拓いたとされる阿波忌部氏は、歴代天皇の大嘗祭で、大嘗宮(だいじょうぐう)内に建てられた悠紀殿(ゆきでん)・主基殿(すきでん)の第一の神座に神衣(かのみそ)として奉られる「鹿服(あらたえ)」と呼ぶ麻の反物(麻織物)を調進する重責を担ってきた。その最古の記録は、平安初期の807年(大同2)に斎部宿禰広成が平城天皇に献上した『古語拾遺(こごしゅうい)』である。また、詳細な記録は、

平安前期の『貞観儀式(じょうがんぎしき)』(859〜877)や『延喜式』(927年)でその内容を窺い知ることができる。その後、平安中期の『小右記(しょうゆうき)』に67代三條天皇の踐祚(せんそ)(1011年)、後期の『山槐記(さんかいき)』に82代後鳥羽天皇の踐祚(1183年)、鎌倉初期の『三長記(さんちちようき)』に84代順徳天皇踐祚(1210年)に関する記録が見られる。なお、「踐祚」とは天皇の位に就くことである。

美馬市木屋平貢には三木家(徳島県最古の国重要文化財)があり、歴代天皇の大嘗祭に関わる「三木家文書」が保管されている。三木家は、鹿服を調進してきた阿波忌部直系の御殿人(みあらかんど)で、鎌倉時代、1260年の90代龜山天皇を最古に、後伏見(93代)・花園(95代)・後醍醐(96代)・光厳(北朝一代)・光明(北朝二代)の6代天皇、合計14通の太政官符(だじょうかんぷ)・官宣旨案(かんせんじあん)等の古文書を保有する。当時、国の公職にも就いてない三木家が、国の公文書の写し、特に太政官符等の写しを保有していることは、当時の朝廷が阿波忌部の御殿人という伝統的な家筋を評

価し、天皇家とゆかりの関係にあったことを示している。『延喜式』や「三木家文書」を紐解くと、旧麻植郡の一民家に「太政官符案」等が御殿人の家筋をもつ忌部氏に依頼が来る。次に鹿服を調進する忌部の氏は、朝廷より派遣された勅使(荒妙御衣使(あらたえみぞつかい)のもと、京の都へと入り、神祇官に鹿服のみ直接預り置かれ、大嘗祭の当日まで丁重に保管された。そして当日、朱雀門で繪服(にぎたえ)(神衣となる絹織物)や他の供物や御贄(由加物)と合流し、御殿人が直接大嘗宮内の神座まで鹿服を運び奉った。

鹿服の調進は、光明天皇の大嘗会を最後に中断。「応仁の乱」が1467年に起こり、戦国時代に突入すると、朝儀の多くは断絶してしまい、大嘗祭が再興されたのは江戸時代、東山天皇の1687年のこと。江戸期の鹿服は忌部代行事官に調進させ、以降、明治まで続けられた。大正天皇の大嘗祭を控え、麻植郡木屋平村貢の三木家当主・三木宗治郎は、三木家文書を抛り所に鹿服の復活を陳情した。その結果、1915年(大正4)、57年ぶりに復活されることになった。昭